撮影／杉浦賢次

撮影／亀田邦平

January 24, 2016 Nagoya Noh Theatre

YUYA Ibi Ai

KOKAJI Naito Tobiyoshi

第60期 第1回

名古屋宝生会 定式能

60th. NAGOYA HOSHOKAI TEISHIKINOH

平成28年1月24日（日）
13時始（開場12時）
名古屋能楽堂

開演前 演目解説のお知らせ

出演能楽師による演目解説をいたします。

- ◆12時 ―― 開場
- ◆12時30分 ―― 解説
- ◆13時 ―― 能開演

正会員券 21,000円（2,000割引）

セット内容
- 第1回～第3回通用券（各5,000円）3枚
- 11月別会自由席券（8,000円）1枚

※詳細は当パンフレット裏表紙記載

入場券料（全自由席）
鑑賞券 5,000円（各回1回限り）
学生券 2,000円（各回1回限り）
※中学生以上30歳以下の学生

- ●入場の際には、受付にて入場券をお渡しください。
- ●上演中の写真撮影、テープレコーダー、携帯電話等のご使用及び、演能やほかのお客様の迷惑となる行為はご遠慮願います。場合によっては退場していただくこともございますのでご了承ください。

演能の解説が聞けるイヤホンガイド（日本語／英語）を無料でお貸し致します。
Noh performance Guide/Rent-free for a wireless headset (Japanese/English)

主催／名古屋宝生会

演者紹介

熊野 シテ

衣斐 愛（いび あい）

「熊野 松風に 米の飯」

日本人の、「能 熊野」に対する思いが表れています。「米の飯」の捉え方は様々です。不可欠、飽きが来ない、かもほどに味が出る、等々。

貴公子、平宗盛に始まり、侍女朝顔、熊野、文、車、短冊。人とともに色々な物が舞台に登場します。文を目にしたその時から、花盛りの都の景色とは真反対の熊野の気持ち。見事に咲いた桜を心から愛でることができず、華やかなはずの酒宴も舞も、決して明るくならず。そして、散る花を見て、抑えられなくなった気持ちを短冊と筆に託し、物語は一番いい形で終結します。

「米の飯」には到底及びませんが、名古屋宝生会の新年第一曲目で、一足早い春の風をささやかにでも吹かせてみたいところです。

1973年生。東京芸術大学卒。名古屋を中心に活躍。つぼみ会を主宰。名古屋市在住。

小鍛冶 シテ

内藤 飛能（ないとう とびよし）

第十二代景行天皇の皇子、日本武尊（やまとたけるのみこと）が東国の蝦夷（えみし）を退治に向かう途中、伊勢や尾張の海の波が立ち返る様子を見て、自分達も早く都に帰りたいものだと先を急ぐ、「草薙（くさなぎ）の剣」のおかげで戦を終わらせることが出来、夜の戸締りを忘れる程平和になった事を語る前半の謡は聴きどころです。名古屋の方でしたらピンとくると思います。その「草薙の剣」に勝るとも劣らない、霊剣（れい）「小狐丸（こぎつねまる）」を稲荷明神の使いである霊狐（こ）に扮する私が、小鍛冶宗近さんと打つ事が出来るでしょうか。良い「相槌（あいづち）」が打てるように頑張りたいと思います。

1980年 尾張の地にて江戸末期より能楽に従事する内藤家に生まれる。祖父は重要無形文化財総合指定保持者 内藤泰二。舞台の他、地域の活動を通して能楽普及・発展に務める。東京芸術大学卒。飛雲会を主宰。

平成28年名古屋宝生会定式能 正会員券について

平成28年は、名古屋宝生会創立60周年に当たり、全4回の内、最後の11月20日（日）を別会として催す事となりました。つきましては、正会員券の販売額を、28年度に限り以下のように改定致します。

【正会員券】

販売額 **21,000円**（2,000円の割引となります）

セット内容
- 第1回～第3回通用券（各5,000円相当） ― 3枚
- 11月別会自由席券（8,000円相当） ― 1枚

特典 11月別会指定席の指定優先権付き

- ●11月別会指定席をご希望の方は、9月1日からの一般販売に先駆けて、7月1日～8月31日まで、優先して指定席をお求め頂けます（2,000円追加で自由席券と指定席券を交換）。
- ●指定席は、席数に限りがあります（正面席のみのご用意）ので、9月1日からの一般販売以降は完売の可能性があります。予めご承知おき下さい。

次回以降の予告

第2回 3月20日（日）
舞囃子 雲林院（うんりんいん） 竹内 澄子
能 山姥（やまんば） 玉井 博祐

第3回 6月19日（日）
能 三輪（みわ） 衣斐 正宜
能 歌占（うたうら） 和久荘太郎

名古屋宝生会 創立六十周年記念別会 11月20日（日）
素謡 翁（おきな） 佐藤 耕司
能 杜若（かきつばた） 沢辺之舞 宝生 和英
能 安宅（あたか） 辰巳満次郎

名古屋能楽堂（名古屋城正門前）
名古屋市中区三の丸1-1-1 TEL.052-231-0088

お問い合わせ・入場券取り扱いは、出演能楽師、または下記まで。

名古屋宝生会 衣斐 正宜 方 TEL/FAX 052-882-5600
メール nagoyahoushokai@castle.ocn.ne.jp
〒466-0051 名古屋市昭和区御器所3-23-19-802

プレイガイド（鑑賞券のみ取扱い）：芸文（地下2F）／栄プレチケ92（栄地下街16番出口）／名古屋市文化振興事業団（ナディアパーク8F）／中日サービス（中日ビル1F）

番組

平成28年1月24日(日)

12時30分 演目解説

13時

【能】熊野（ゆや）

シテ 衣斐 愛
ツレ 内田 朝陽
ワキ 飯冨 雅介
ワキツレ 橋本 叡
大鼓 河村眞之介
小鼓 後藤嘉津幸
笛 鹿取 希世
地謡 吉村 純功 和久荘太郎 真野 久 衣斐 正宜 竹内 孝成 佐藤 耕司 竹内 淳一 藪 克徳
後見 辰巳満次郎 辰巳大二郎

【狂言】薩摩守（さつまのかみ）

シテ 井上松次郎
アド 井上 蒼大 鹿島 俊裕
後見 佐藤 友彦

休憩15分

【仕舞】玉之段（たまのだん） 玉井 博祐
花筐（はなかたみ） 狂 竹内 澄子
地謡 佐藤 耕司 衣斐 正宜 辰巳満次郎 辰巳大二郎

15時20分

【能】小鍛冶（こかじ）

シテ 内藤 飛能
ワキ 高安 勝久
ワキツレ 橋本 宰
間 今枝 郁雄
大鼓 河村裕一郎
小鼓 後藤孝一郎
太鼓 鬼頭 義命
笛 大野 誠
地謡 森下 光 藪 克徳 能勢 渉 辰巳満次郎 鈴木久仁七 和久荘太郎 平田 正文 辰巳大二郎
後見 衣斐 正宜 玉井 博祐 衣斐 愛 内田 朝陽

附祝言

16時20分 終演予定

※演目・演者等は、止むを得ない事情により変更になる場合がございます。
※時間は予定ですので遅速をお含み置きください。

【能】熊野（ゆや）

平宗盛（たいらのむねもり）（ワキ）は、池田の宿の老母の病を心配する熊野（ゆや）（シテ）を、京の都に引き留めています。そこへ池田の宿から朝顔（ツレ）がやってきて老母からの手紙を渡します。熊野は、年老いた身はこの春を待ちきれないという内容の手紙を読み、老母に会いたい心情を訴えますが、宗盛は熊野の言葉に耳を貸さず、花見に行く事を強制します。清水寺までの道中、外は花盛りで明るいが、熊野の心は沈んでいます。宗盛に命じられ花見の宴で舞を舞う途中、にわかに村雨が降り花を散らすので、熊野は老母を思う気持ちを和歌にしたため宗盛に差し出します。宗盛も心を打たれ、ついに帰郷の許しを出し、熊野は喜び池田の宿へ急ぐのでした。

◆老母の手紙を宗盛の前で読み上げる場面（文の段）は能の語り物として聞かせ所で、切々とした内容は思わず涙を誘います。

【狂言】薩摩守［さつまのかみ］

東国の新発意（しんぼち）（アド。若い修行僧）が住吉天王寺へ参詣する途中、一軒の茶屋に立ち寄り休息します。茶代も持たずに一服した新発意に茶屋（アド）は道中を案じ、この先にある大河神崎川の渡し船に乗るには、かなりの船賃を支払わないと乗せてもらえないと告げると・・・。

◆この演目は「秀句」が一つのテーマとなっています。秀句とは秀逸な俳句でもあり、また巧みな掛け言葉による洒落句でもあります。当時は秀句を好んで嗜む者も多く、狂言の中にも度々起用されています。また、キセル乗車のことを、かつては「薩摩守」と呼んでいた事を知る人は多くないでしょう。さて新発意はこの秀句を上手く利用して、無事対岸へ渡り天王寺参拝の本望を遂げられたのでしょうか。行方を左右する船頭（シテ）との駆け引きが見どころです。

【仕舞】玉之段［たまのだん］

海人（あま）の女（シテ）は、子のために海に潜って、竜宮から面向不背（めんこうふはい）の宝珠を、自らかき切った乳の下に押し込めて奪還する、壮絶な様子を見せます。能「海人」より

【仕舞】花筐 狂［はながたみ くるい］

照日前（てるひのまえ）（シテ）は継体天皇（けいたいてんのう）からの別れの手紙と形見の花筐（はなかご）をかき抱いて悲しみにくれます。天皇の警護の役人に花筐を打ち落とされて憤然とした様子を見せます。

【能】小鍛冶［こかじ］

一条帝がある夜、三条の小鍛冶宗近（こかじむねちか）（ワキ）に御剣（みつるぎ）を打たせよとのお告げを蒙（こうむ）り、勅使（ちょくし）である橘道成（たちばなのみちなり）（ワキツレ）を送りその由を伝えます。宗近は突然の宣旨（せんじ）に驚き、相槌（あいづち）を打つ者がいないことを理由に辞退しようとしますが、帝の御霊夢によるもの故、必ず仕れとの命令に進退極（きわ）まり、神力を頼りに稲荷明神へ祈願に出かけます。すると彼の前に一人の童子（前シテ）が現れ、不思議にも、すでに勅命を知っており、君の恵みによって御剣は必ず成功すると言って宗近を安心させます。そして日本武尊（やまとたけるのみこと）の草薙（くさなぎ）の剣の物語や故事を述べ、神通力によって力を貸与えることを約束して、稲荷山に消えて行きます。宗近は七五三縄（しめなわ）を張った檀をしつらえ支度を調えて、祝詞（のりと）を唱えて待ちます。すると稲荷明神（後シテ）が霊狐（れいこ）の姿になって現れ、相槌となって御剣を打ち、表に小鍛冶宗近、裏に小狐と銘を入れ、勅使に捧げ再び稲荷山に帰って行くのでした。

◆名刀「小狐丸（こぎつねまる）」は五穀豊穣（ごこくほうじょう）、天下泰平（てんかたいへい）をもたらす剣であり、霊狐が小鍛冶宗近を助け、平和と豊かな稔（みのり）りを約束するという祝意にあふれた能です。
また「相槌を打つ」という言葉の語源にもなっています。

Column

能舞台に置かれる「車」

能「熊野」の曲中、宗盛一行が花見に出かける場面で、地謡の「牛飼い車寄せよとて」という謡の後に、後見が車の作り物を舞台に出します。そしてシテ（熊野）が車の作り物の中に入りツレ（朝顔）がシテの後方に、ワキは向かって右側に立ち、ワキツレ（従者）もその後方に立ちます。舞台で車自体は動かさず、シテと地謡が、車が通って流れていく景色を謡で表現します。

この車の作り物は、左右に車輪があり、前方には長柄があり、上には屋根がついていて屋根衣という布で最上部を覆っています。また、紅段と呼ばれる赤い縞模様の布で枠組みの大部分を巻き、さらに紅段で模様を描くようにして車を飾ります。色も形も、作り物の中でもとりわけ豪華な車は、舞台に出すと舞台上が一気に華やかになります。

「熊野」の他にこの形の車を出す曲は「右近」と「是界」です。右近は熊野と同様、花見車です。舞台は花盛りの京都、北野の右近の馬場で、女蔦と侍女が車に乗っている場面は熊野とは違った華やかさがあります。一方、是界では、車に乗るのはワキ、比叡山の僧です。熊野、右近とは異なり、車をワキ座に、脇正面に向けて置きます。

もう一曲、ワキが車に乗る曲に「車僧」があります。車僧の車だけは、他の曲と車の形が異なります。左右に車輪、前方に長柄がありますが、屋根はありません。椅子のような形の車です。曲の後半には、車僧が自在に車を操る場面があります。

「小塩」には「車之仕方」、「野宮」には「車之伝」という小書（特別演出）があり、この二曲は小書がついた時のみ車を舞台上に出します。

実際動くことのない舞台上の車ですが、それが置かれた場面、風景を想像しながら謡を聞いていただき、車の辿る道を演者とともに味わって下さい。

撮影／亀田邦平